SANIN CHUOU SHINPO
'04.6.5

VS7-16

歴史を生かした街づくりを考える

山陰歴史ワークショップ

＜福留　強＞

＜1＞

生涯学習の拠点としての博物館

活用したい地域の財産

生涯学習は「生涯にわたる学習」という、いわゆる「一生涯お勉強」と誤解されている傾向がある。長寿社会を迎え生涯にわたる学習が、その生きがいづくりのために役立つことから「学習行為」のみが強調されるが、実際は「生涯学習は、自己の充実・啓発や『生活の向上』をめざす活動」を総称するものである。その目指すところを学習活動への参画を通じて、改めて認識しようと「全国生涯学習フェスティバル」が実施されている。

ところで「生活の向上」とは「職業能力の向上」を表すもので、生涯学習は、生活を高めるための学習ということを意味している。商工、観光など「儲（もう）けるための学習」のほかに、スポーツ、文化、ボランティア活動など生涯学習に含まれる活動なのである。

そのあらゆる生涯学習の中で「地域における学習」が、最も生活に近い学習の場である。一般に学習施設には、図書を通じて市民の学習支援する「図書館」と人的交流とイベント等を媒体とする「公民館」、モノを媒体とするのが「博物館」があるといわれているが、あらゆる学習要素の中でも「地域に関する情報」をもつ施設が「博物館」である。

鹿児島県横川町。過疎地であるが、かつては山ケ野金山として全国的にも知られた町である。今でも山肌のあちこちに廃坑跡の洞穴や石垣など、随所に昔の名残が見られる。この廃坑が、地域の歴史研究家の研究によって、史実が再現されたのである。山ケ野金山の昔の写真を発見し、さらに資料を見い出し集落の過去が蘇ったのである。かつての栄華や様々な人々の生きざまが再発掘されたのである。住民はこの研究を手がかりに、あらためて史実を学び、「エコミュージアム」を研究するとともに「金山ウォーク」として地域イベントに発展させたのである。そこには住民の誇りが生まれ、郷土に対する愛情が育まれているのである。

まちは、地域の宝をさがし、それを磨くことから発展するものである。それが、歴史であり、芸術文化であり、人であり、自然であり、生活文化であり、人のあらゆる生活の部面にかかわるものである。横川町は、金山の資料という歴史的な宝から、地域を起こしたのである。

さて、こうした地域の宝の所蔵庫がいうまでもなく博物館なのである。したがって、地域の生活に根ざした博物館づくりこそが、まちづくりを考える重要な拠点になることは、いうまでもない。

島根県立博物館。生涯学習の拠点としての役割も期待されている

博物館は、資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に市民の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行う施設である。いわゆる市民の学習の場として提供するものである。そして、いわば地域の宝を展示しているものである。また活動を通じて蓄積された情報が、博物館に地域情報として蓄積されていくのである。その意味では、博物館は地域づくりのセンターとして位置づくもので、ここからまちづくりの発想が多く生まれるものといってもよいであろう。

地域の宝（資源）を「探し」「調べ」「推理し」「整理し」、なければ「創造する」。これが、地域資源との活用の鉄則である。だとすれば、博物館が静的な施設であってはならない。常に、所蔵する情報が活用され、時には加工され、整理され、人々の活動の指標として存在するべきものなのである。そしてそれらが、さらに情報として生きてくるのである。そのためには、公民館や図書館、はては学校等とも連携を深める必要がある。

これまでの博物館は、資料を保存するという機能を基本として、日常的に市民の生涯学習に供与するものであった。学習の利用者にとっては、学習の教材であり、教具であることはこれまでと変わらないものである。

これからの博物館は従来の機能に加えて、地域づくりに寄与する機能がもっと強調されてもよい。利用しなければ博物館には、貴重な資料が眠っていることになるわけである。それが活用されれば、まちづくりに飛躍的に存在意すものでもある。

例えば、「一節の用心。おせん泣馬肥やせ」は、福岡町が史実・まち「日本一短い母紙」という形で生ものである。博物館これからもあらゆづくりの資源が、発展のためにその待っているのである

（聖徳大学人文授・生涯学習研究

×　×

ふくとめ・つよ

九四

まれ。

島大

文部

教育官、九州女子

授を経て現職。全

まちづくりブーム

け人の一人。NP

全国生涯学習まち

協会理事長、全国

習まちづくり研

表。著書に「いま

民改革を」「まち

ボランティア」な

＝土曜日に掲載し